

## TOPICS

2015年09月29日

# どうしたら日本の少子化は止められるか 4



## 1. 日本ではなぜ極端に婚外子が少ないのか

### 歴史的な人口安定化メカニズム

日本と北欧では家族制度の考え方が違うので、単純に女性の社会進出を推進するだけでは、十分な少子化対策にならないと主張してきました。

これは実は、日本の歴史が人口圧力との戦いの歴史であったことと深く結びついています。かつて沖縄の与那国島に「くぶらばり」という制度がありました。これは妊婦に「くぶらばり」といわれる海辺の深さが 20m ほどもある 2~3m ほどの裂け目を飛び越えることを強いた制度だといわれています。これは与那国島に課せられた過酷な人頭税を避けるための人口調整メカニズムだといわれています。

いまも残る七五三のお祝いも、数えの 3 歳、つまり満年齢で 1 歳から 2 歳までは、育つかどうか分からない、または口減らしとして、生まれたすぐの子を間引いてしまった歴史の名残だとも言われます。つまり育てることを選択され、そして育つであろうということがほぼ確実になるまでは、氏神様に子どもとして報告しなかった制度といわれています。

日本のように中緯度の国では、当時、熱帯アジアのように出生が感染症で相殺されるほどの高い死亡率ではなかっただろうと想像されています。その意味では、潜在的に高い人口圧力にさらされ続けていたわけです。

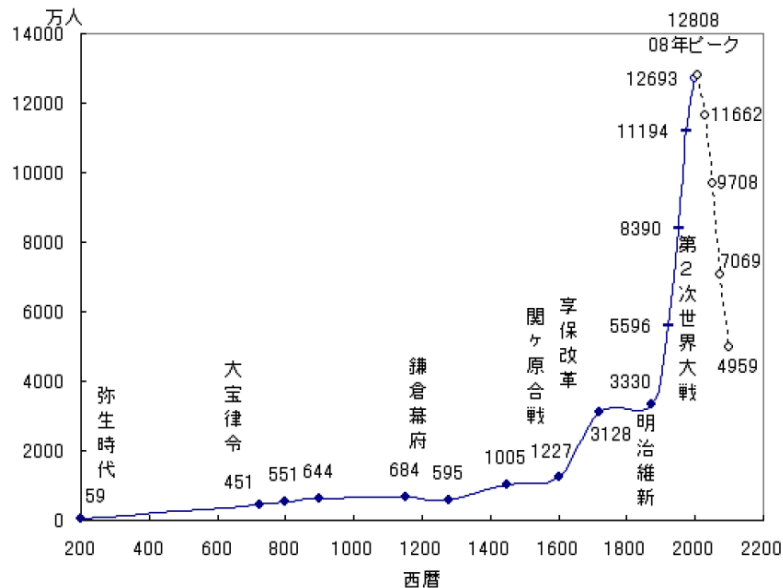
かつて田舎に広がっていた風景である中山間地の棚田なども、この人口圧力と無縁ではありません。モンスーン気候にあることもあり、日本は米作を中心とした文化を構築しました。コメという作物は、労働投入による生産の弾力性（つまり手間をかければ生産性が上がるという性質）が非常に高い作物です。1 ha 当たり、粗放で特に水管理もしないで生産した場合、わずか 600kg 程度しか生産できないものが、水田を作り、施肥をし、水管理をきちんとすれば、その 10 倍の 6 トンから 8 トンほども収穫できます。

人口圧が高い中で、その人口を維持しようとすれば、耕地面積が限られている中では、生産性を上げるしかありません。そのようなコメの持つ性質が、膨大な労働力を投入し、棚田を築かせ、耕して天に至るといふ日本の中山間地の農村の風景を作っていたのです。コメの生産であっても、新田開発であっても技術的なブレークスルー（打開策）で生産能力が拡大したときには、一過的に豊かになるとは思いますが、すぐに潜在的な人口圧力がそれを埋めてしまうことになります。

日本の歴史人口学を切り開いた速水融や鬼頭宏らの研究は、日本の人口の歴史を明らかにし、私たちの祖先がどのように生きていたのかを教えてください。その全容をここでご紹介することはできませんが、一つ言えることは、日本はイエ（家）を経済単位として生きてきたこと、イエの数以上には人口を扶養できなかったということは言えそうです。つまり新田開発などで、生産性が上がったときにはおそらく分家が進み、イエの数が増えたのです。言葉を代えれば、イエの数＝人口であったと考えることができるのです。

そして歴史人口学の教えるところによれば、イエは地主の本家筋から分家が進み、最後にはいわゆる水呑み百姓になります。貧乏人の子沢山ではなく、貧乏人は子どもも持てなかったことが分かっています。そして末端のイエほど絶家しやすい構造を持っています。

図1. 日本人口の長期推移



出所: 社会実情データ図録: <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/shushi.html>

この家を一定数とすることで、人口規模を制限するやり方は、地域によって、特に西日本と東日本では対処が異なっていたようです。

西日本の場合、都市への奉公がこの人口抑制メカニズムを作り出していたようです。具体的に言えば、まず長子以外は一種の口減らしとして都市へ奉公に出ます。当時の都市は、感染症だけでなく「江戸わずらい」と言われた脚気のような一種の生活習慣病も多く、過酷な奉公の中で、出稼ぎに出たまま都市で死亡した者もかなりの割合に上ったようです。

さらに、また奉公の年季が明けて帰村する場合も、口減らしを兼ねて、都市に奉公に言っているので、帰村は当時の出産適齢期を過ぎてからとなります。貧しい家庭を作る夫婦は、多くの場合、運よく分家を相続できたとしても、出産適齢期を過ぎたいわゆる晩婚となり、栄養状態も悪い当時では実際的に妊娠そのものがあまりできなかったようです。そうすると当然いわゆる絶家となります。この空いたイエには、経済主体としてのそれを守るために、また本家筋から次男坊以下の同じような人たちが降りてきて、継承していきました。

東北地方であれば長男だけが結婚を許され、次男以下は長男が死亡した場合の予備として、結婚も許されず、労働力とされていたようです。このような東西の違いは、都市の発達や人口流動性の違いによって説明できると考えられます。農業の場合、タワケという言葉が愚かな行動を意味するように、田んぼを分けると、その土地で誰も食べていくことができません。逆に言えば、ある一定の面積の田畑があれば、ある一定規模の人口は扶養できたわけです。つまりその地域でイエを維持するためには、一定の土地と人口規模を何が何でも守らなければならなかったのです。

そのため日本は長子相続というメカニズムの中で、長男だけが特別待遇で、次男坊以下を差別する社会的価値観を構築するしかなかったのでしょうか。このような差別を制度化するメカニズムを徹底することで、当時の高い死亡率の中で相続の可能性を高めるとともに、一定の人口規模だけを維持するメカニズムがイエと分かちがたい形で、徹底して人々の価値観の中に刷り込まれていったと言えるようです。

いずれにしても、このような連鎖は、上は天皇家から始まって、下は水呑み百姓まで連綿と続きます。簡単に35年で世代が交代すると仮定して、いま出会った2人のご先祖様の数は950年程度で1億3千万人を超えます。島国で基本的に人口移動のなかった日本では、おそらく

1000 年も遡れば誰でも親戚ということになります。人口統計的に考えれば、戦争中のキャンペーンであった「天皇の赤子」はあながちフィクションではないということになります。日本の宗教である神道が天皇家を中心とした信仰の体系となっていることもあり、日本人はどこかで遠い意味での家族という意識があるのかもしれませんが。

ここで言う社会制度としてのイエは、これはかつて考えられていたような、単系のイエだけを示すものではありません。天皇家から水呑み百姓まで、その末端の経済主体であるイエが絶家すれば、本家筋からそのイエを維持する人材が送り込まれるという構造になっており、日本全体がイエの連鎖ともいべき社会構造として、それが維持されてきた構造を持っていたということになります。

いずれにしても、一定の扶養力しかない中で、イエという経済主体を守る形で日本の人口は維持されてきました。繰り返しになりますが自然の出生に任せればあっという間に食べられなくなってしまうので、日本の場合、「イエ（家）」が人口調整の基本的なメカニズムとして機能してきたのです。

今でも普通の結婚式であれば「××家」「○○家」結婚披露宴なんて書いてありますよね。いまの結婚の1/4ぐらいがいわゆる「できちゃった婚（授かり婚）」だという統計があります。言葉を代えれば、子どもができてしまえばそれが逆に結婚を後押ししているわけです。そして若い人たちも周りの大人も比較的普通にそれを受け入れています。出産と結婚と「イエ（家）」という制度が、今なお日本人の中には深く結びついているのです。そしてそれはおそらく数百年以上にわたって営々と引き継がれてきた慣習や価値観でそう簡単に変わるものではないでしょう。

結婚のありかたについては多様な議論があることもあり、ここでは議論しません。しかし、形はともかくとしても結婚以外の出産は女性に過酷な負担を強い、子育てにおいても婚外子を持っている女性の負担は非常に大きなものとなることは残念ながら事実です。結婚というのは社会制度として男性の責任を明確にした制度で、男性からすれば「責任者は私です」と宣言していることにほかなりません。現在、恋愛の姿も、生き方も多様化しており、どの生き方が正し

いということはいえませんが、少なくとも女性にとってやはり結婚してからの出産のほうが圧倒的に安心感があり、負担が少ないというのは事実ではないでしょうか。

現在の状況を考えれば、かつてのようにイエ（家）に縛られる必要はまったくないと思います。しかし少子化対策をしようとするのであれば、女性が子どもを心理的にも経済的にも産みやすい環境を作っていくしかありません。その環境を作る上で、やはり結婚という制度は重要であると言えるのだらうと思います。特に日本の場合には、その歴史的な背景からも、「結婚できるようにすること」が最も有効な少子化対策となるのではないのでしょうか。

## 2. 日本の社会のありかた

### 近代から新しい時代へのパラダイム転換

ここで提言してきたことは、近代が個人を、そして人口増加を前提として築き上げてきたさまざまなパラダイムに対するアンチテーゼとなってしまいました。しかし、人口の急減が社会に大きな負担を強いることを緩和し、持続可能な社会を作る時間を見出すためには、このような人口の変化に合わせて社会制度を変えることを求められていると言えると思います。

いま人口構造が高齢化する中で、すべての人がそのできる範囲で、その能力を使って社会に参画することが求められています。それは言葉を変えれば近代産業社会が前提としたような、9時から5時までオフィスに出てきて、100%その能力を会社のために捧げ、女性は家庭で男性のそのような活動を支えるという、「贅沢」が許されない時代になったということだと思えます。

情報通信技術（ICT）の発達は、特段オフィスにいなくとも、ホワイトカラーの仕事ができるというように、私たちの仕事のありかたを大きく変えています。いかに適切に評価するかという難問はあるのですが、適切な評価がなされれば、別にオフィスで仕事をしなくても良いようになってきているのです。

人口構造からも人の使い方に贅沢が許されなくなった中で、これから日本の社会が目指すべき

は、一人ひとりがその可能な範囲で社会に貢献できるようなシステムを持った社会だと思いません。そのためには、もう少し女性が子どもを持ってもいいな、持てるな、と感じられるような、生物としての人間（ヒト）の性質に社会制度が合わせる必要があるのではないのでしょうか。

以前に提言しましたが、子どもが職場で走り回っていてもそれを許容するような社会的な寛容性、平たく言えば、もう少し「暢気な」社会を、最先端の ICT 技術を使って実現することが必要だと感じているのですが、いかがでしょうか？

さて次の号では、人口問題の性質を改めて確認してみて、それから環境問題と人口、労働問題と人口策、各論に入って行きたいと思います。

(楠本 修)